



Title	日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動に関する語用論的研究：自己卑下発話を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	隋, 暁静
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13816号
Issue Date	2019-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76894
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Sui_Xiaojing_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 隋 暁 静

学位論文題名

日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動に関する語用論的研究

——自己卑下発話を中心に——

・本論文の観点と方法

本論文は、褒めの否定などとして現れる自己卑下を会話参加者間でのフェイスを調整して不均衡が拡大しないようにするコミュニケーション上のストラテジーと見て、どのような調整原理や手法が用いられているか、日本語の会話にはどのような特徴や傾向が見られるかなどを論じている。特に、言語学的な知見として、グライス系の情報語用論、ポライトネス原理やそれ以降の知見を含む対人関係語用論、日本語会話の特質を探る文化語用論、トラブルや修復に関する会話分析の手法などを取り込みながら、コーパスやドラマ脚本、その他の会話データから広汎に会話例を取り上げて具体的に分析している。

・本論文の内容

本論文は4部10章で構成されている。第I部第1章では、研究対象と目的、また論文構成に言及する。同第2章では、本論文にかかわる重要な先行研究を概説しながら、フェイスバランスという考え方を説明している。ここで言うフェイスは社会学者I. ゴフマンの考えを言語学者S. レビンソンがポライトネス理論に取り込んだものであるが、その後のポライトネス研究の中でそれぞれの自己像に関する欲求の充足や補償・保持や保護にかかわる会話上の操作としてのフェイスワークに重点が移ってきた状況を概観し、情報語用論の基礎概念としての推意やポライトネス理論の変遷、また、文脈設定に関する考え方なども確認している。

第II部第3章では、双方の会話参加者のフェイスの偏りが生じないように、あるいは、初期状態とのずれが生じないように、均衡を保つことが会話を円滑に進行させる上で重要な要件になっていると見るフェイスバランスの考え方について述べ、何がフェイスバランスに影響を及ぼす発話や言語行為となるかを整理している。また、発話や言語行為によって自身のフェイスや相手のフェイスを上昇させたり、下降させたりすることについてその類型を区分し、主観的な《評価》が強く関連を持つことと、事実的な叙述にも肯定的評価や否定的評価が結びつくこととの、二点から評価性の解釈によってフェイス上昇・フェイス下降の作用が生じると見なしている。

第4章では、フェイスバランスの調整方策を、会話分析の手法を参考に、どの位置（どのターン）で開始するか、回復のきっかけや動機との関わりの点から区分している。また、不均衡がどのように生じるかについても、褒めなどによってフェイス上昇が生じる場合と批判などによってフェイス低下が生じる場合、すぐに回復措置を開始する即時調整と別の話題を優先して回復措置を急がない遅延調整に分けている。調整の位置や緊急度には、調整行為における優先性の差異がかかわっていることが指摘され、また、フェイスバランス調整は、単にフェイスの上昇や下降にかかわる発話のみでなされるわけではなく、共感表明など他の手法を使って微調整することも可能であることなど、複合的な調整の手法についても分析がなされている。

第III部は本論文の中核的論考となる5つの章よりなる。第5章では自己卑下についての概念規定を行っている。謙遜は、それによって相対的に話者の評価を下げるが、相対的に他者に対する敬意を明示したり、品格を確保したりするなど、実現すべき目的を前提とする行動である。一方、自己卑下は自分の評価を低下させる発言や評価の低下を導く発話として、発話という形式的側面と自己評価の低下を実現するという機能的側面から定義できるものとする。これらの定義に

よって両者の差異は明確となり、自己卑下は発話として謙遜という行動を成立させる一つの要素あるいは手段と見なすことが可能となる。

また、同章では、自己卑下がとる形式上の特徴についても論じており、直接的な自己卑下と間接的な自己卑下に分けることを提案している。直接的な自己卑下には、否定評価や否定表現を用いて、自己評価や自己に関連する存在物や事象・特性の評価を低下させる現象が該当する。ここでは、否定的な評価につながる談話標識を利用する方法もとられることが指摘されている。また、否定的な表現や談話標識には、派生的なものも含まれ、更に、基準を示しながらその基準に及ばないことを述べて否定評価を形成する手法があることも指摘されている。これらは多くが慣習推意あるいは一般会話推意と見るべきものであることも明らかにしている。加えて、自己卑下には誇張や緩和があることも観察している。褒めに対して強い自己卑下を提示するとそれは相手の発話への強い否定となり、ポライトネス上は一種の違反になってしまうため、レベルを変えたり、評価のポイントをずらしたり、モダリティによって弱化するなどさまざまな手法が用いられることも解明している。このような理論的分析のほかに自己卑下が話者のどのような点についてなされるかについても計量的な分析と記述をしており、才能や能力が3分の1と多く、ついで遂行結果や現状が6分の1程度やや多いことが確認されている。

第6章では、自己卑下の開始状況・きっかけについて論じている。先行研究では十分に自己卑下の開始やきっかけが明確になっていない点を指摘しつつ、論点をまず整理する。また、どのような文脈で自己卑下発話が見られるかについて収集例を対象に計量し、全体的な傾向を把握している。自己卑下発話から始まる会話では一見するときっかけがないままに自発的に自己卑下を行っているように見えるが、その後の発話で予測されるフェイスバランスの不均衡化に備えてあらかじめ逆向きのフェイスバランスを用意しておくなど、予備的に自己フェイスを下げておくストラテジーがあることを指摘している。

第7章では、自己卑下発話の動機と語用論的機能を静的(static)な観点と動的(dynamic)な観点に分けて論じている。静的観点からは、自己卑下発話の動機と関与する特性が見られ、態度表示やFTA（フェイスの脅かし）軽減あるいは負担軽減、予防線を張ることなどいくつかのタイプに分類し、それぞれを詳細に分析している。動的観点からは、動的に上下する会話参加者のフェイスに関する対応について、いくつかのタイプに分類している。

第8章では自己卑下発話を行う話者に聞き手としての相手がどのような反応を示すかについて分類している。反応は、不同意・同意・共感提示・自己卑下に自己卑下、話者の意図に合わせる反応、無反応など多様であるが、ほとんどの場合フェイスワークを重視していることが窺えるものの、典型的な対応とは異なるケースがあることも指摘している。自己卑下に対して不同意に分類できる褒めの発話が返される場合も、別の話題を導入してずらして褒める手法（話題転換）や評価基準を変えることで再評価を提示する方法があり、話題を一般化して合理化する方法のほかに、受容拒絶や科学的な分析談話などが見られることを明らかにしている。フェイスバランスの均衡化は、グライスの会話協調原理に同じプライオリティで位置づけてもよい強固な原則に見えるが、それでも質の公理は尊重され、嘘と見なされることは回避するなど、拮抗する面があることも解明されている。

第9章では対人関係の観点から見たバランス行動をポライトネスの事前調整、利益と負担の関係を踏まえた調整、その他の調整などの観点から整理している。

第IV部第10章では全体の趣旨をまとめて論考を振り返り、残された今後の課題を確認して論を閉じる。